

第廿三講 アブラハムの信仰 羅馬書第四章の大意（十月二日）

羅馬書は第三章までに於て先づ一段落を告げたのである、萬人の罪人なること、故に人は到底行を以て神の前に義たり得ぬこと、従つて只神より義を賜はる外に道なきこと、そして神は此義を我等に賜ふて義ならざるに義とする道を拓き給ひしこと、そしてこれはイエスの十字架の贖罪ありしに由ること、されば今われらは唯このキリストを信ずる信仰のみに依て義とせらるゝこと、故に人には何等誇るべきなく凡ての良き事は皆基督に於てあること——是れ第三章までに於てパウロの説きし所である。

彼は進んで第四章に於てイスラエルの始祖アブラハムの信仰に就て説述するのである、イスラエルの始祖と今の我等と何の係はりあらんやと云ふて、此章を不用視する者あらばそは大なる誤謬である、其の甚だ重要な箇所なる事は此章を熟讀してみて解ることである、我等は充分に此章を重要視すべきである。

先づ此章の構想を窺ふに畧ぼ四段より成つて居ること明かである、第一段は一節より八節までである、その説く所はアブラハムが行の故に義とせられたのではなくして信仰の故に義とせられたのである故に、これ純粹なる恩恵であつて幸福の極であると云ふにある、茲にアブラハムの信仰の性質が示されたのである、次ぎの第二段は九節より十二節である、その主眼はアブラハムは割禮を受けざる前に義とせられたのである故、彼の信仰の實例は實に全人類に向つての模範であり、従つて異邦人もユダヤ人も悉く彼を信仰の師父として仰ぐべきであると云ふにある、形を見ずして心を見るパウロの深さが茲に現はれて居るのである、第三段は十三節より十六節まで

である、世界の嗣子^{よつぎ}たるは律法に依るアブラハムの子孫に約束せられたことではない、凡てアブラハムの信仰に倣ふ者―即ち靈魂における彼の子孫―に約束せられたことである、換言すればアブラハムの信仰に倣ふ者は即ち世界の嗣子であると、これ第三段の主眼である、そして第四段は十七節以下である、茲にアブラハムの信仰が神の約束を確信する信仰であること、及び我等も亦彼の如く「我主イエスを死より甦へらしめ神を」眞に信ずれば彼と同様に義とせらるゝことが説かれて居る、まづ以上の如き思想を骨格として第四章は成り立つて居るのである。

羅馬書第四章の意味を充分領得せんためには豫め創世記第十一章以下に於てアブラハムの生涯を學ばねばならぬ、まづ父テラと共にカルデヤのウルを出で、ハランに移り住みし事より、エホバの命に従つてハランを出で、カナンに入り、さらに南に移り、遂に飢饉^{わざはひ}に禍せられて沃饒なるエジプトに移住し、再びカナンに歸り、其處に甥のロトと別れて住み、エホバより大なる約束を受け、又イサクを與へられ、そして其イサクを一度献げんとせし等、彼の生涯は波瀾多く興味津津たるものである、そして彼の生涯を學ぶことは單に羅馬書第四章の研究に役立つのみではなく、神を信仰する生涯の好模範として基督者に取つて甚だ益多き事である、否たゞに基督教徒に限らない、如何なる人に取つてもアブラハムを知るは頗る有意義の事である、何となれば彼はルーテルやミルトンやウヲシントンらと同様に世界的人物の一人であるからである、彼の如き世界的人物の生涯と信仰と其精神とを探究することは誰人にとつても有價値なことである、現代人はアブラハムの如き人物を舊しとして顧みず、カント、ゲーテ、シルレル等近代の人をのみ知ることを貴んじて居るが、近代の優秀なる人物は多くはアブラハム及び其

子らの弟子であることを知らない、そして源泉を忘れて末にのみ汲んでゐる、何故溯つて歴史を太く流れつゝある一大生命の源を究めんとせぬのであるか、怪訝の至りである。

前述せし通り第四章はアブラハムの信仰について説述せし所である、之に對して今日の人は云ふであらう、我等はパウロより救の道を更に尚ほ聞かんとするのである、イスラエルの祖たるアブラハムに就いて我等何の學ぶ要があらうか、我等は唯キリストと其福音について知れば足る、他は全く我等に係はりなき事であると、併し乍らこれパウロを知らず又アブラハムを知らざる事である、抑もパウロはユダヤ人である、そしてアブラハムは如何なるユダヤ人にとつても肉の始祖であると共に又靈の始祖である、即ち信仰の偉大なる師表である、今までパウロは福音の中心義が信仰の義であつて行の義でないと言き來つた、之に對して彼の同胞は「然らば信仰の師表たるアブラハムの場合に於ても亦然るか」と問ひたゞすに相違ないのである、もしアブラハムの場合も同様であればパウロの所説は完全なる裏書を得たこととなるが、もし然らざる場合はパウロの所説より力強き支柱が取去らるゝことになるのである、之を一言にして云へば、ユダヤ人たるパウロとしてはアブラハムの支持なくして此大眞理を強く主張することは不可能であつたのである、これ彼が第四章全體をアブラハムの信仰を説くに用ひた理由である。

曾て説きし如くパウロは偉大なる進歩家であつたと共に亦偉大なる保守家であつた、革進と守舊とは彼の表裏となつてゐた、そして此二方面を一身に具有するものが即ち健全なる人である、孰れか一に偏するは慥かに不健全の徴候である、根なき所に花はないと等しく過去なき處に現在未來はない、過去の或る確實なるものに根柢を

置くは眞理の特徴である、パウロの説く福音がアブラハム及び多くのイスラエルの優秀なる豫言者や詩人の善き信仰と思想とに根柢を有して、初めて健全であり、確實であり、且眞に革命的なのである、人類過去の經驗を裏書として有つは眞理の眞理たる所以である、福音は此意味に於て他の凡ての宗教や思想や信仰に打ち勝つのである、之を我等日本民族だけに於て見るも、福音もし果して神の眞理ならば我民族の過去に於て抱有せし凡ての良き信仰、良き思想、良き精神を充たすものでなくてはならぬ、即ち後者が前者の裏書たらねばならぬのである、そして我等は其事を然りと斷定するものである、實に我等の祖先の抱きたる最も貴きものは更に醇化せる姿に於て福音の中に見出さるゝのである、革進は即ち守舊、進歩は即ち保守、パウロは舊き古きアブラハムの歴史に於て……時の流を隔つること幾千年なる悠遠の過去の中に……新時代を導くべき神の福音の好證明を見たのである、げに最も舊くして最も新しきは神の眞理である、これ永遠性をその特徴とせるがためである。

先づ第一段たる一節―八節を見るに前述せし通り之はアブラハムの信仰の特質を述べし所である、一節は「さらば肉體につける我等の先祖アブラハムは何の得し所ありと言はん」と改むべきである、肉についてのユダヤ人の始祖たるアブラハムの場合には如何と先づ第四章の問題が茲に提起されたのである（此問題をパウロが提起せし理由は既に述べた）、そして云ふ、アブラハムは行に由て義とせられず信仰に由て義とせられたのである、故に恩恵である、故に幸福であると、

- (2) もしアブラハム行に由りて義とせられたらんには誇るべき所あり、されど神の前には有ることなし、(3) そは聖書に何と云へるかアブラハム神を信ず其信仰を義とせられたり(と)、(4) 工はたを作つくす者の價あたいは恩と云

はず受くべき者也、(5) されど工なき者も不義なる者を義とする神を信じて其信仰を義とせられたり。

之に依つてアブラハムが行を義とせられたのでなく信仰を義とせられたのであるとのパウロの主張を知るのである、創世記十五章六節に云ふ、「アブラハム、エホバを信ず、エホバ之を彼の義と爲し給へり」と、これをパウロは第三節に引用したのである、兩者を比較して字句に多少の相違はあるが、之はパウロが舊約聖書のギリシャ譯より引用したからの事で其意味は孰れも同様である、即ちアブラハムは神より其信仰を義と教えられたのである、別の語にて云へば神はアブラハムの信仰を義と數え給ふたと云ふのである。

若し普通道德に循^{したが}つて云へば善行（行の義、功、工）^{いさをし、はたらき}あつて即ち義がある、故に人は善行に由て義とせられるのである、しかしアブラハムは行よりも寧ろ信仰に由て義とせられた、即ち其信仰を其義として數へられ、認められたと云ふのである、數へられたと云ふのは甲を乙として數へられたと云ふのであつて他の物を以て其物に代へた意味である、數へたと云ふのは恰も帳簿に記入したと云ふことに當るので、例へば人と人との關係に於て甲を受け取るべき場合に乙を受け取つて、之を甲を受けたこととして帳簿に記入したと云ふやうな意味になるのである、アブラハムの場合に於ては行のことは別としてエホバが彼の「信仰」を其帳簿に「義」として記入したと云ふのである、故にこれ恩恵である、もし行を以てしたならば當然エホバより其報として義とせらるゝのであるが、信仰を義と數へられたと云ふのである故一切は恩恵となるのである。

かくアブラハムは信仰を義と數へられた、然らば斯く義と數へられし彼の信仰の性質は如何、これ當然起るべき問題である、信仰と云へば之を單なる「熱信」と思ふ人が多い、忠實に集會に出席する人を見て熱心の信者で

あると評するは人の常である、併しそれは唯禮拜に出席することが熱心であると云ふだけのことで、果して其人が眞の信仰を持つてゐるか如何は分らないのである、世には日常の實際生活は全く別にして、即ち自己の生活上に少しもキリストの精神を持ち來らずして、全く不信仰と同様または其以下の低卑なる生活を爲しつゝ、たゞ集會に熱心に出席するだけを以て信仰と考へ、この信仰だにあらば義とせらるゝと考ふる人がある、此種の人は宗教とは唯安息日に崇嚴なる儀式を營む事及びそれに出席する事であると考へてゐる、従つて安息日以外に於ては不信者と全く同様なる精神を以て同様なる生活を送るのである、これ詩人ホイットチャの謂ゆる「一週日の中一日だけを神に、他の六日を財神に^{マシモン}献げる」ものである、これ信仰なるものを全然誤解したものである、又信仰を以て或る一列の教義を知識的に了得する事であると考へ、正統派の信仰を抱くを以て誇とし、此信仰を以て義とせらるゝと考へる人がある、此種の人はこの知的確信に於ては頗る強固であつて、他の信仰を異端として排するに頗る熱心である、従つて宗派心が頗る強烈である、しかし人を義とする信仰は決して此種の信仰ではない、知的確信は決して人を義とする信仰ではないのである。

アブラハムの信仰は決して右の如き信仰ではなかつた、「アブラハム神を信ず其信仰を義とせられたり」と云ふ、アブラハム神を信ずと語は極めて簡單である、しかし深き又強き語である、神を信ずとは神自身を信ずることである、神に關する或事を信ずることではない、全然神に信頼することであつて、其他のあ或者または或事を信ずることではない、親子の關係、師弟の關係、友人の關係等に於て最も理想的なのは相互の全き信頼に立つものである、互に信ずると云ふ所に至つて其關係は眞に理想的となるのである、アブラハムが神を信じたと云ふのは全

然神を信賴したのである、少しの疑いもなく又咄きもなく全く神を信じて一切を任せ奉つたのである、アブラハムは此意味に於て神を信じて其信仰を義とせられたのである。

アブラハムの信仰が此種の信仰であつた事は彼の生涯が證明する、ハランを出でよと云へば命これ従ひ、エデプトを出でよと云へば命これ従ひ、獨子イサクを獻げよと云へば又命これ従ふ、何の躊躇も何の疑もない、そこに面倒があつても、不都合があつても、或は又人情としての悲痛哀苦があつても、それに頓着することなくして神の命に直ちに従ふ、これ眞に神自身を信じて居たからの事である、神に信賴し神御自身を信ずる事これ即ち信仰である、此信仰ありし故にアブラハムはそれを義と數へられたのである。

信仰は信じ仰ぐことであると云ひて上のみを仰ぎて自己の状態を省みないのは危険である、信仰とは神を信ずることである、故に神の命のまゝに動くことである、信仰の生涯とは神御自身を信じ奉りて聖意に従つて世を送る生涯である、黄金が萬能と思はれつゝある今の時代に住める我等が、同じく此惡精神を抱きつゝありては、如何に神を信ずと思ひ居るも此種の信仰に由ては義とせられないのである、かゝる時代の惡精神を振りすて神の意に従はんとする信仰でなくては義とせられない、又國際戰爭の惡にして避くべきものであることは今や誰も感知せる所である、そして平和の招來を促すものは實に軍備の撤廢である、各國の會議を開きて軍備の縮小を議するも、戰爭廢止の實現せられざるは勿論軍備の縮小それ自身すら到底實現せらるべくもない、實に平和は會議に由て來らず、信仰に由て來る、神を信じて全く任せ奉らば軍備縮小の如きは即坐に實行し得らるゝ筈である、世界の各國が絶對的平和を願ひつゝ而かもその實現の不可能なるは是れ神を信ずる信仰が——殊に基督教國

と自稱する國に於て——充分に無いからである、其他個人の事に於ても、信仰ありと稱し乍ら明白に惡しき所の職業を棄て得ざるが如きもこれ亦眞に神を信じないからである、勞めず、紡がざる野の鳥をも養ひ給ふ神はいかで彼を信ずる一人を餓死せしめよう、眞に神を信ぜばその御保護に信賴して、惡しき職業の如きは直ちに棄て得る筈である。

以上の如きが神を信ずる信仰である、之が義とせらるゝ信仰である、アブラハムは此點に於て信仰の師表である、我等また宜しく彼に倣ふべきである。

第二段（九節—十二節）の主意は初めに述べた通りであるが、之は割禮問題に觸れし所なる故ユダヤ人ならぬ我等に係はりなしと云ふは誤つてある、之を洗禮と見て我等に充てはめて考ふべきである、アブラハムは割禮を受けし後義とせられたのではない、その前に義とせられたのである、同様に我等は洗禮を受けたからとて義とせられるのではない、義とせられし故に其印として洗禮を——もし受くべきものならば——受くるのである、英國々教會の如きは洗禮の儀式それ自身に大なる功德ありとし、之を受けて人は初て義とせられ又聖靈を受くと主張す、これ形式に大なる値を置く事であつて、靈的なるべき所を形式に墮したのである、信仰は信仰である、神と其獨子キリストを信ずる事である、この信仰あれば聖書の明示せる如く義とせられるのである、洗禮は形式の事であれば之に伴ふも可、伴はざるも可である、ミルトン、クロムウエル、デヨーヂ・フォックス等の信仰は實に此種の信仰であつたのである。

第三段（十三節—十六節）の主意も初めに述べて置いた、凡てアブラハムの信仰に倣ふ者は世界の嗣子とせら

るゝと云ふのである、彼の肉の子孫はたゞカナンの地を與へられたのみである、しかし彼の靈の子孫―彼の信仰を學ぶ者―は世界萬物を與へらるべしと云ふ、「萬物は汝等の物なり……或は世界、或は生（ある者）、或は死（せる者）、或は今のもの、或は後のもの、是れ皆汝等の屬なり」（哥前三の二一）とある、世界萬物の嗣子たるは信仰に由て義とせられし者の特權であると云ふのである。

第四段（十七節―二五節）は第一段に似てアブラハムの信仰の性質を説いたものである、彼は「死せし者を生かし無き者を有りし如く稱^{（とと）}ふる神」を信じ、汝の子孫は天の星の如くなるべしとの神の約束ありし故に「望むべくもあらぬ時に尚ほ望みて多くの國人の父と爲らんことを信」じた、イサクを獻げよとの命に接しても「神は死より之を復活^{（いきかへ）}し得ると」（ヘブル十一の十九）思ひて遲疑する所なかつた、無より有を起し死を變へて生となす神を彼は信じた、此信仰が義とせられたのである、「神はその約束し給ふ所を必ず爲し得べしと心に定む、是故に其信仰義とせられたり」とある。

我等も亦彼の如く「死にし者を活かし無き者を有りし如く稱^{（とと）}ふる神」を信すべきである、此神を信じて死を思はず生を思ひ、無を思はず有を思はねばならぬ、愛する者の死に會して直ちに其復活の朝を思ひ、キリスト甦りし如く彼に在る者も亦甦るべしと信ぜねばならぬ、げに死を否定して生を肯定する所に基督者の特徴が存する、アブラハムの此信仰、それに我等も倣はねばならぬ、そして信ずる者に復活の恩恵を賜ふ神を堅く信ぜねばならぬ、「我等もし我主イエスを死より甦へらしし神を信ぜば同じく義とせらるゝ事を得べし」と云ふ、イエスを復活せしめし神、イエスに在る者をいつかは復活せしめ給ふ神、その神を信じて死を以て死とせず限りなき生命の門

戸を思ふ者、永生の中に死を忘るゝ者、かゝる人は此信仰の故に義とせらるゝのである。

羅馬書は第三章までに至って、まず一段落を告げたのである。万人の罪人であること、ゆえに人は到底行いによつて神の前に義とされないこと、したがってただ神より義を賜わるほかに道がないこと、そして神はこの義を我らに賜わつて義でないものを義とする道を拓き給うたこと、そしてこれはイエスの十字架の贖罪があつたことによること、それゆえ今我らはただこのキリストを信じる信仰のみによつて義とされること、ゆえに人にはなんら誇るべきものがなくすべての良いことはみなキリストにおいてあること——これが第三章までに至ってパウロの説いたところである。

彼は進んで第四章においてイスラエルの始祖アブラハムの信仰について説述するのである。イスラエルの始祖と今の我らと何の関わりがあるうかと言つて、この章を不要視する者があるならば、それは大きな誤りである。そのきわめて重要な箇所であることは、この章を熟読してみて分かることである。我らは十分にこの章を重要視すべきである。

まずこの章の構想をうかがうに、ほぼ四段より成つていることが明らかである。第一段は一節から八節までである。その説くところは、アブラハムが行いのゆえに義とされたのではなくして信仰のゆえに義とされたのであるゆえに、これは純粹なる恵みであつて幸福の至りであると言うにある。ここにアブラハムの信仰の性質が示されたのである。次の第二段は九節から十二節までである。その主眼は、アブラハムは割礼を受けない前に義とさ

れたのであるゆえ、彼の信仰の実例は実に全人類に向かつての模範であり、したがって異邦人もユダヤ人もことごとく彼を信仰の父として仰ぐべきであると言うにある。形を見ないで心を見るパウロの深さがここに現れているのである。第三段は十三節から十六節までである。世界の相続人となることは律法によるアブラハムの子孫に約束されたことではない、すべてアブラハムの信仰にならう者——すなわち靈魂における彼の子孫——に約束されたことである、換言すればアブラハムの信仰にならう者はすなわち世界の相続人であると、これが第三段の主眼である。そして第四段は十七節以下である。ここにアブラハムの信仰が神の約束を確信する信仰であること、および我らもまた彼の如く「我らの主イエスを死者の中からよみがえらせた方」を真に信じれば彼と同様に義とされることが説かれている。まず以上のような思想を骨組みとして第四章は成り立っているのである。

羅馬書第四章の意味を十分に理解するためには、あらかじめ創世記第十一章以下においてアブラハムの生涯を学ばねばならない。まず父テラと共にカルデアのウルを出てハランに移り住んだことにより、主（エホバ）の命令に従ってハランを出てカナンに入り、さらに南に移り、ついに飢饉に災いされて豊饒なるエジプトに移住し、再びカナンに帰り、そこに甥のロトと分かれて住み、主（エホバ）より大いなる約束を受け、またイサクを与えられ、そしてそのイサクを一度献げようとした等、彼の生涯は波乱が多く興味深いものである。そして彼の生涯を学ぶことは、単に羅馬書第四章の研究に役立つのみではなく、神を信仰する生涯の良い模範としてキリスト者にとってきわめて益が多いことである。いやただキリスト教徒に限らない。いかなる人にとってもアブラハムを知ることが非常に有意義なことである。なぜなら彼はルターやミルトンやワシントンらと同様に世界的人物の一人

であるからである。彼の如き世界的人物の一人の生涯と信仰とその精神とを探ることは誰人にとっても価値あることである。現代人はアブラハムの如き人物を古いものとして顧みず、カント、ゲーテ、シラー等近代の人のみを知れることを重んじているが、近代の優秀なる人物は多くはアブラハムおよびその子らの弟子であることを知らない。そして源泉を忘れて末端のみを汲んでいる。なぜさかのぼって歴史を太く流れつつある一大生命の源を極めようとしなのか、怪訝の至りである。

前述した通り第四章はアブラハムの信仰について説述したところである。これに対して今日の人は言うであろう。我らはパウロより救いの道をさらにいつそう聞こうとするのである、イスラエルの祖であるアブラハムについて我らに何の学ぶ必要があるのか、我らはただキリストとその福音について知れば足りる、他はまったく我らに関わりがないことであると。しかしながらこれはパウロを知らずまたアブラハムを知らないことである。そもそもパウロはユダヤ人である。そしてアブラハムはいかなるユダヤ人にとつても肉の始祖であると共にまた霊の始祖である。すなわち信仰の大いなる手本である。今までパウロは福音の中心義が信仰の義であつて行いの義でないと説いてきた。これに対して彼の同胞は「ならば信仰の手本であるアブラハムの場合においてもまたそうであるか」と問い正すに違いないのである。もしアブラハムの場合も同様であればパウロの所説は完全なる裏付けを得たこととなるが、もしそうでない場合はパウロの所説より力強い支柱が取り去られることとなるのである。これを一言にして言えば、ユダヤ人であるパウロとしてはアブラハムの支持なくしてこの大真理を強く主張することは不可能であつたのである。これが彼が第四章全体をアブラハムの信仰を説くことに用いた理由である。

かつて説いた如くパウロは大いなる進歩家であつたと共にまた大いなる保守家であつた。革新と守旧とは彼の表裏となつてゐた。そしてこの二方面を一身に有するものがすなわち健全なる人である。いづれか一つに偏するのは確かに不健全の兆候である。根がないところに花はないのと同じく過去がないところに現在未来はない。過去のある確実なるものに根底を置くことは真理の特徴である。パウロの説く福音がアブラハムおよび多くのイスラエルの優秀なる預言者や詩人の良い信仰と思想とに根底を有して、初めて健全であり、確実であり、かつ真に革命的なのである。人類過去の経験を裏付けとして持つことは真理の真理たるゆえんである。福音はこの意味において他のすべての宗教や思想や信仰に打ち勝つのである。これを我ら日本民族だけにおいて見るも、福音もし果たして神の真理ならば、我らの民族の過去において抱いていたすべての良い信仰、良い思想、良い精神を満たすものでなくてはならない。すなわち後者が前者の裏付けとならねばならないのである。そして我らはその事をそうであると断定するものである。実に我らの祖先の抱いた最も貴いものは、さらに磨かれた姿において福音の中に見出されるのである。革新はすなわち守旧、進歩はすなわち保守、パウロは古く古いアブラハムの歴史において……時間の流れを隔てること数千年である悠遠の過去の中に……新時代を導くべき神の福音の好証明を見たのである。まことに最も古くて最も新しいものは神の真理である。これは永遠性をその特徴としてゐるためである。

まず第一段である一節―八節を見るに、前述した通りこれはアブラハムの信仰の特質を述べたところである。一節は「それでは、肉による私たちの先祖アブラハムの場合は、何と言つたらよいでしょうか」と改めるべきで

ある。肉についてのユダヤ人の始祖であるアブラハムの場合はどうかと、まず第四章の問題がここに提起されたのである（この問題をパウロが提起した理由はすでに述べた）。そして言う、アブラハムは行いによって義とされず信仰によって義とされたのである、ゆえに恵みである、ゆえに幸福であると。

(2) もしアブラハムが行いによって義と認められたのであれば、彼は誇ることができません。しかし、神の御前ではそうではありません。(3) 聖書は何と言っていますか。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」とあります。(4) 働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされます。(5) しかし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。

これによってアブラハムが行いを義とされたのではなく信仰を義とされたのであるとのパウロの主張を知るのである。創世記十五章六節に言う、「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と。これをパウロは第三節に引用したのである。両者を比較して字句に多少の相違はあるが、これはパウロが旧約聖書のギリシア語訳より引用したからのことで、その意味はいずれも同様である。すなわちアブラハムは神よりその信仰を義と教えられたのである。別の言葉で言えば神はアブラハムの信仰を義と数え給うたと言うのである。

もし普通道徳に従って言えば、善行（行いの義、功績、働き）があつてすなわち義がある、ゆえに人は善行によって義とされるのである。しかしアブラハムは行いよりもむしろ信仰によって義とされた、すなわちその信仰をその義として数えられ、認められたと言うのである。数えられたと言うのは甲を乙として数えられたと言うの

であつて、他の物をもつてその物に代えた意味である。数えたと言うのはあたかも帳簿に記入したと言うことに当たるので、例えば人と人との関係において甲を受け取るべき場合に乙を受け取つて、これを甲を受けたこととして帳簿に記入したと言うような意味になるのである。アブラハムの場合においては、行いのことは別として主（エホバ）が彼の「信仰」をその帳簿に「義」として記入したと言うのである。ゆえにこれは恵みである。もし行いをもつてしたならば、当然主（エホバ）よりその報いとして義とされるのであるが、信仰を義と数えられたと言ふのであるゆえ一切は恵みとなるのである。

このようにアブラハムは信仰を義と数えられた。ならばこのように義と数えられた彼の信仰の性質はどうか、これは当然起こるべき問題である。信仰と言へばこれを単なる「熱心」と思う人が多い。忠実に集会に出席する人を見て熱心の信者であると評するのは人の常である。しかしそれはただ礼拝に出席することが熱心であると言ふだけのことで、果たしてその人が眞の信仰を持っているかどうかからないのである。世には日常の實際の生活はまったく別にして、すなわち自己の生活の上に少しもキリストの精神を持ち来ないで、まったく不信仰と同様またはそれ以下の低卑なる生活をしつつ、ただ集会に熱心に出席することだけをもつて信仰と考え、この信仰さえあれば義とされると考える人がある。この種の人は宗教とはただ安息日に莊嚴なる儀式を営む事およびそれに出席することであると考へている。したがつて安息日以外においては不信者とまったく同様なる精神をもつて同様なる生活を送るのである。これは詩人ホイットリアのいわゆる「二週間の中一日だけを神に、他の六日を財神^{アモン}に献げる」ものである。これは信仰なるものを全然誤解したものである。また信仰をもつてある一連の教理を知

的に理解する事であると考え、正統派の信仰を抱くことをもって誇りとし、この信仰をもって義とされると考える人がある。この種の人はこの知的確信においては非常に強固であつて、他の信仰を異端として排するに非常に熱心である。したがって宗派心が非常に強烈である。しかし人を義とする信仰は決してこの種の信仰ではない。知的確信は決して人を義とする信仰ではないのである。

アブラハムの信仰は決して右の如き信仰ではなかった。「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」と言う。アブラハムが神を信じたという言葉は極めて簡単である。しかし深いまた強い言葉である。神を信じるとは神自身を信じることである。神に関することではない。全然神に信頼することであつて、その他のあるものまたはあることを信じることではない。親子の關係、師弟の關係、友人の關係等において最も理想的なのは相互の全き信頼に立つものである。互いに信じると言うに至つてその關係は真に理想的となるのである。アブラハムが神を信じたと言うのは全然神を信頼したのである。少しの疑いもなくまたつきまきもなくまったく神を信じて一切をお任せしたのである。アブラハムはこの意味において神を信じてその信仰を義とされたのである。

アブラハムの信仰がこの種の信仰であつたことは彼の生涯が証明する。ハランを出よと言えば命令に従い、エジプトを出よと言えば命令に従い、ひとり子イサクを獻げよと言えばまた命令に従う。何の躊躇も何の疑いもない。そこに面倒があつても、不都合があつても、あるいはまた人情としての悲痛哀苦があつても、それに頓着することなくして神の命令に直ちに従う。これは真に神自身を信じていたからのことである。神に信頼し神ご自身

を信じること、これすなわち信仰である。この信仰があつたゆえにアブラハムはそれを義と数えられたのである。

信仰は信じ仰ぐことであると言つて、上のみを仰いで自己の状態を省みないのは危険である。信仰とは神を信じることである。ゆえに神の命令のままに動くことである。信仰の生涯とは神ご自身を信じ奉りて、御心に従つて世を送る生涯である。黄金が万能と思われつつある今の時代に住む我らが、同じくこの悪精神を抱きつつあつては、いかに神を信じると思い居るもこの種の信仰によつては義とされないのである。かかる時代の悪精神を振り捨てて神の御心に従おうとする信仰でなくては義とされない。また国際戦争の惡にして避けるべきものであることは今や誰人も感じているところである。そして平和の招来を促すものは実に軍備の撤廃である。各国の會議を開いて軍備の縮小を議するも、戦争廢止の実現されないのは勿論、軍備の縮小それ自体すら到底実現されるべくもない。実に平和は會議によつて来ない、信仰によつて来る。神を信じてまったくお任せしたならば、軍備縮小の如きは即座に実行し得るはずである。世界の各国が絶対的平和を願いつつしかもその実現の不可能であるのは、これは神を信じる信仰が——特にキリスト敎國と自称する國において——十分でないからである。その他個人のことにおいても、信仰ありと称しながら明らかに悪い職業を捨て得ないようなものも、これまた真に神を信じないからである。働きもせず、紡ぎもしない野の鳥をも養ひ給う神は、どうして彼を信じる一人を餓死させようか。真に神を信じればそのご保護に信賴して、悪い職業の如きは直ちに捨て得るはずである。

以上の如きが神を信じる信仰である。これが義とされる信仰である。アブラハムはこの点において信仰の手本である。我らもまたよろしく彼にならうべきである。

第二段（九節—十二節）の主意は初めに述べた通りであるが、これは割礼問題に触れたところであるゆえ、ユダヤ人でない我らに関わりなしと言うは誤っている。これを洗礼と見て我らに当てはめて考えるべきである。アブラハムは割礼を受けたのち義とされたのではない。その前に義とされたのである。同様に我らは洗礼を受けたからといって義とされるのではない。義とされたゆえにその印として洗礼を——もし受けるべきものならば——受けるのである。イングランド国教会などは洗礼の儀式それ自体に大なる功德があるとし、これを受けて人は初めて義とされまた聖霊を受けると主張する。これは形式に大なる値を置くことであつて、霊的であるべきところを形式に堕したのである。信仰は信仰である。神とそのひとり子キリストを信じることである。この信仰があれば聖書の明示する如く義とされるのである。洗礼は形式のことであればこれに伴う可、伴わないも可である。ミルトン、クロムウェル、ジョージ・フォックス等の信仰は実にこの種の信仰であつたのである。

第三段（十三節—一六節）の主意も初めに述べておいた。すべてアブラハムの信仰にならう者は世界の相続人とされようのである。彼の肉の子孫はただカナンの地を与えられたのみである。しかし彼の霊の子孫——彼の信仰を学ぶ者——は世界万物を与えられるべしと言う。「すべてのものは、あなたのものだからです。……世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの」（コリント人への手紙第一 三章二十一節）ですとある。世界万物の相続人となることは、信仰によって義とされた者の特権であると言うのである。

第四段（十七節—二十五節）は、第一段に似てアブラハムの信仰の性質を説いたものである。彼は「死者を生

かし、無いものを有るものとして召される神」を信じ、あなたの子孫は天の星のようになるという神の約束があったゆえに、「彼は、神には人を死者の中からよみがえらせる希望がないときにも、希望をもって信じ、多くの国々の父となりました」となった。イサクを献げよとの命令に接しても「神には人を死者の中からよみがえらせることもできる」(ヘブル人への手紙十一章十九節)と思つて遲疑するところがなかった。無より有を起こし、死を変えて生となす神を彼は信じた。この信仰が義とされたのである。「神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。『だからこそ、『彼には、それが義と認められた』のです』とある。

我らもまた彼の如く「死者を生かし、無いものを有るものとして召される」を信じるべきである。この神を信じて死を思わないで生を思い、無を思わないで有を思わねばならない。愛する者の死に会して直ちにその復活の朝を思い、キリストがよみがえつた如く彼にある者もまたよみがえるべしと信じねばならない。まことに死を否定して生を肯定するところにキリスト者の特徴が存在する。アブラハムのこの信仰、それに我らもならわねばならない。そして信じる者に復活の恵みを賜う神を堅く信じねばならない。「私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、義と認められるのです」と言う。イエスを復活させられた神、イエスにある者をいつかは復活させ給う神、その神を信じて死をもって死としないで限りなき生命の門戸を思う者、永生の中に死を忘れる者、かかる人はこの信仰のゆえに義とされるのである。